

trivia ■皮膚科のトリビア■ 127

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きしたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

Nanta nevus

第16回北里臨床皮膚フォーラムから(平成27年3月5日)

真皮内母斑あるいは真皮病変が主体の複合母斑で、続発性骨形成を認めることがあり、Nantaの骨母斑と呼ばれている。臨床的には通常の色素細胞母斑と変わらない。ほとんどが顔面に生じる。骨組織は母斑細胞塊から少し離れた深部に認められることが多く、母斑細胞の増殖によって閉塞した毛包が嚢腫状に拡張し、嚢腫の破綻が異物肉芽腫を生じ、徐々に骨組織が形成されることが成因と考えられる。

「確かに顔の色素細胞母斑の下に嚢腫があることは、よく経験する。名称からはもっと特殊なnevusかと思ったが、意外に身近にありそうだ。原著は1911年でNantaはフランス人」。

ネコから感染する スポロトリコーシス

第39回東海医真菌懇話会から(平成27年3月14日)

野良ネコの寿命が長くなり、FIDA(ネコのAIDS)を発症するネコが増えたことから、ネコに発生するスポロトリコーシスが増加している。原因菌は*sporothrix globosa*による。臨床型はヒトと同様で、皮膚限局型、皮膚ーリンパ管型および播種型がある。ネコでは難治性の皮膚潰瘍を呈するが、キズを

舐めるために口腔や鼻腔、爪に付着し、それがヒトへの感染拡大の原因となる。飼い主や獣医師は注意が必要。

「スポロトリコーシスが人畜共通感染症だとは知らなかった。ペットの皮膚病は医真菌学会でときどき講演を聴くが、ペットを飼う人が増えていく現代では、真菌感染に注意する必要があるようだ」。

チョコレート負荷試験の実際

某製薬会社WEBセミナーから(平成27年4月21日)

異汗性湿疹や内因性アトピー性皮膚炎で問題になるニッケルによる全身性接触アレルギーは、内服再投与試験で証明することが必要。ニッケルの負荷は、リンツチョコレートの85% (1枚に470 μ gのニッケルを含有) を用いて、1日あたり1/2枚を4日間摂取することを標準としている。通常の食事で得られるニッケルの量の2倍にあたる。

「金属のパッチテストでニッケル、クロム、コバルトが陽性であれば、チョコレートは控えるようにと指導はしているが、負荷試験までは行ったことがない。チョコレートを使って患者にとって受け入れることが可能な金属負荷試験の標準があれば、参考になる。これなら開業医でもできそうだ」。

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」, そこから転じて「瑣末なこと」となり, 今では雑学的知識, 豆知識, などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス:

<http://www.asai-hifuka.com>

サルコイドーシスの診断基準と重症

第114回日本皮膚科学会総会から (平成27年5月29日)

サルコイドーシスの診断基準が改定される。日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会が担当。組織診断群と臨床診断群に分け, 下記の基準にしたがって診断する。

【組織診断群】全身のいずれかの臓器で壊死を伴わない類上皮細胞肉芽腫が陽性, かつ, 既知の原因の肉芽腫および局所サルコイド反応を除外できているもの。ただし, 特徴的な検査所見および全身の臓器病変を十分検討することが必要である。

【臨床診断群】類上皮細胞肉芽腫病変は証明されていないが, 呼吸器, 眼, 心臓の3臓器中の2臓器以上において本症を強く示唆する臨床所見を認め, かつ, 以下の特徴的検査所見の5項目中2項目以上が陽性のもの。1) 両側肺門リンパ節腫脹, 2) 血清ACE高値または血清リゾチーム値高値, 3) sIL-2R高値, 4) GaシンチまたはPETにおける著明な集積所見, 5) 気管支肺胞洗浄検査でリンパ球比率上昇, CD4/CD8比が3.5を超える上昇。「検査所見から, 血清中Caとツ反陰性が消えた。難病法ではすべての指定難病に重症度分類を加味した認定基準の明記が義務づけられ, それに対応した新基準とのことである。重症度分類もサルコイドーシス学会のHP (<http://www.jsosg.com/>) で見ることができる。それにしても難病法の申請用紙

は, 以前より書きにくくなった。

血管腫・血管奇形診療ガイドライン

第114回日本皮膚科学会総会から (平成27年5月30日)

皮膚の血管異常 (vascular anomaly) は内皮細胞の増殖性変化による血管腫と, 局所の形態異常を主体とする血管奇形に分類される。日本形成外科学会と日本IVR学会は, 2013年に診療ガイドラインを策定した。国際血管異常研究機関 (ISSVA) 分類に基づく病名を踏襲し, 母状血管腫は血管性腫瘍の中の乳児血管腫, 単純性血管腫は内皮細胞の増殖がないので毛細血管奇形, 海綿状血管腫は同様に静脈奇形, リンパ管腫はリンパ管奇形となった。また, 古典的には巨大血管腫においてKasabach-Merritt症候群の合併が知られているが, 最近の研究ではこれを合併するのは乳児血管腫ではなく, Kaposiform hemangioendotheliomaやtufted angioma (別称angioblastoma of Nakagawa) など他の稀な血管系腫瘍であることが示されている。

「血管炎がChapel Hill分類を踏襲して病名が変わってしまったように, 血管腫の病名も国際基準に当てはめられることになるのだろうか。血管腫・血管奇形診療ガイドラインは医療情報サービスMinds (<http://minds.jcqh.or.jp/>) で全文が公開されている。勉強しておこう」。